ポスター発表Ｐ⑩

Faculty センター、Teaching＆Learning センターの役割 —ブリガム・ヤング大学（プロボ）の場合—

川野　卓二
（徳島大学 大学開放実践センター）

１．はじめに

平成 23 年 8 月 21 日から 12 月 27 日までの 4 か月余りの期間、米国ユタ州プロボ市にあるブリガム・ヤング大学(BYU)でサバティカル活動に従事し、BYU や近郊の大学で実施されているさまざまな FD 活動に体験参加する機会を得た。BYU の FD 活動は、現在、Faculty Center（FC）と Center for Teaching & Learning（CTL）の 2 センターが中心になって進めている。本報告では、最初に BYU の概要を述べ、BYU 内の教育改善に関わった組織の変遷をたどり、現在の FD 活動担当部局である両センターの役割と教員によって認識されている有用性について報告する。

BYU は、1875 年に設立されたブリガム・ヤング・アカデミーを基にしており、1903 年に学校名を現在のブリガム・ヤング大学と改称した。現在は、560 エーカーの敷地を有し、約 300 の建物からなる総合大学である。

BYU は現在、カーネギー教育振興財団の分類では、RU/H（研究大学/高い研究活動）群に入っているが、2010 年秋学期の学生数は、32,947 人であり、その内大学院生は 3,164 人だけで、学部教育が中心の大学であることがわかる。10 のカレッジがあり、187 の学士、64 の修士、26 の博士課程が存在している。学内での雇用状況は、専任教員が 1,479 名、専任職員（管理職を含む）が 2,497 名、非常勤での被雇用者は 1,336 名であった。また、学内での学生の被雇用者が 14,054 名に及んでいるのが特徴的である。

２．教育改善関連組織の変遷

BYU 学内では、教育・学習を促進するための取り組みが、それ以前も分散した形態で存在していたが、1973 年 9 月に全学的な組織として the Division of Instructional Research, Development, and Evaluation (DIRD&E)が設立された。この部門は、Instructional Psychology & Technology (IP&T)学部と融合し、Instructional Development プログラム、Instructional Research and Development 学部, そして the Institution for Computer Uses in Education を結びつける存在となった。しかし、それぞれの組織の使命があいまいにしか定義されていなかったことによる問題が出てきたため、1976 年に新しく the McKay Institute (MI)が 6 つのサービスを提供することを使命として設立された。

しかし、1985 年には the McKay Institute もその活動を突然停止することになった。MI が提供するサービスが多岐にわたったため、その活動の有用性を全体として評価することが難しく、管理部門もその存在価値を認めることが難しかったようである。MI の活動停止後も、Testing Services や、Media Services の一部門としての Instructional Graphics (IG)の活動などは個別に継続されていた。その後、IG は the Imaging Technology Center として独立したが、その名称が一般的でなかったため、再度 the Instructional Technology Center (ITC)と名称を変更した。

1991 年 11 月末に、学内における教育の質の向上を目指して組織的な取り組みを行うために Faculty Center (FC)を設立することが発表され、1992 年 1 月から正式に活動を開始した。その年の 6 月、オクラホマ大学の Dee Fink 教授の下で訓練を受けた Lynn Sorenson を FD スペシャリストとして採用した。彼女は教育改善プログラムやワークショップを数多く手掛けた。Faculty Center Newsletter の創刊、学生による授業参観プログラム、Teaching Assistant (TA) カンファレンス、新任教員のための職能開発セミナー、第 3 木曜日のブラウン・バッグ・ランチ・ミーティングなどがそれである。また、1 対 1 で教員との個人的なコンサルテーションも数多く実施した。FC は 2012 年に、開設 20 周年を迎える。

通信教育を担当していた the Department of Independent Study (IS)は、その当時はまだ初期段階にあったオンライン・コースを BYU 外部の学生向けに開講するために ITC の領域に入り込んできた。このため、BYU 内の学生に焦点をあてたオンライン・コースを準備するため、1998 年に the Office of Course Development (OCD)が創設された。そのわずか 8 か月後、ITC や、OCD、IS のコース開発部門が the Center for Instructional Design (CID)として統合された。CID は、以前に存在した同様の the McKay Institute とは多くの点で異なっていた。中でも最も重要な違いは、その活動経費の出所である。それまでは、それぞれのプロジェクトの対象となっている学部や個人から集めていたが、CID は大学中央からの経費が中心となった。また、CID は教育改善に関するプロジェクトを学内から公募で受け付けることにより、これまでは予算の関係で実施を見送らざるを得なかったようなプロジェクトでも、見込みがありそうな影響力の大きい優秀なものを選別し実施することができるようになった。

しかし、CID のスタッフには、その出身組織に関連したプロジェクトに限定した仕事をするものが多く、その内部はばらばらになっていた。そこで、新しく CID と FC からのスタッフを合わせて 2007 年の 5 月に Teaching & Learning センター(CTL)を設立することが発表された。CTL は、教育活動をその準備から評価改善まで全般にわたって支援し、学生の学びを促進することを第一の目的として、いろいろなサービスを提供している。

３．FC と CTL の役割

BYU 学内における現在の FD プログラムは、FC と CTL の 2 つの組織が FD の 3 領域を分担してカバーしている状況にある。米国 POD は、FD の領域を、個人としての教員に対する Faculty Development(FD)、コースやカリキュラム、学生の学びに焦点をあてた Instructional Development(ID)、大学組織の構造や組織間の関係に焦点をあてた Organizational Development(OD)の 3 領域としているが、BYU では、FC が FD と OD の領域を、CTL が ID の領域を担当している構図になっている。

FC は、BYU 新任教員に対して 18 か月にわたる Faculty Development Series (FDS)を実施している。FDS は、(1)秋学期に 2 週間おきに 7 回実施される Fall Seminar、(2)冬学期から次の年の冬学期までの間の Mentoring、(3)冬学期終了後の 2 週間にわたって実施する Spring Seminar、(4)春学期から翌年の冬学期まで取り組む FDS Projects、(5) 2 年目の 3 月に実施する Banquet から構成されている。これらのプログラムを通して新任教員は、学生の学びをサポートするための知識や実践法に関する理解を深め、活発な研究活動を続けていくための研究者としての役割やその活動方略について考え、大学コミュニティ、専門職コミュニティに貢献する機会や教員組織の一員としての役割を探ることになる。また、時間管理や生産性向上のための技術を伸ばし、専門職能力開発のために経験豊かな同僚教員との間にメンタリング関係を築き、3 年目、6 年目に実施される雇用継続のためのレビュー手続きに備えることになっている。FC では、他にも中堅や古豪教員のための継続的な職能開発や管理職のために 3 領域（ポリシー、ダイアログ、リーダーシップ）をサポートできる体制を整えている。さらに、年間を通じて、研究者として、また個人としての能力開発のために誰でも参加できるワークショップやセミナーを開催している。

一方、CTL は、その歴史は浅いが、学内の教育改善と学生の学びを促進するために、8 人の教育・学習コンサルタントと、彼らから訓練を受けた学生が中心となって多くのサービスを提供している。現在、CTL が開発を進めてきた BYU 独自の LMS の Learning Suite (LS) の開発最終段階に入っており、2012 年の冬学期からの運用にむけて準備を進めている。他にも、授業改善のためのコンサルティングを学生が行う Students Consulting on Teaching (SCOT)や、様々な IT を用いて授業改善を行うプロジェクトを援助する Walk-in センターにも学生がかかわっている。

FC、CTL の有用性についても当日発表する。